

「俺のこと、覚えていられる？」いままで会話をしたことがない人にいきなりそんなふう
に声をかけられたら、びっくりしてしまいますよね。

優秀賞の「いちばん覚えているもの」は、地味で内気な「私」が、クラスの人気者の男
子に話しかけられる場面から始まります。彼は来週転校することが決まっていたのでした。

まずその書き出しに惹きつけられました。そして、「記憶に残りたい」という彼の本意が
どこにあるのかが解明されていく展開も、心地よいものでした。

「私」が心に抱えている傷。その傷のためにできなくなってしまったこと。それでも好き
で秘かに続けていたこと。そんな「私」に気づいてくれていた彼…と進行していく物語は、
少々わざとらしさはあるものの、それがあまり気にならないのは、彼と「私」のキャラの
爽やかさによるものが大きいと思います。

彼が有する優しさの力。「私」が持つ素直であることの尊さ。その二つがずっと胸に入っ
てきて、いちばん「記憶」に残る作品でした。

奨励賞の「あの手と、あの音」は、主人公の独白から始まります。

「ああ、何で私はここにいるんだろう」

そこはヴァイオリンコンクールの会場。コンクールで優秀な成績をおさめてほしいとい
う母の期待に応えるため日々の練習スケジュールをこなしている「私」は、音楽を楽しめ
なくなっていました。

そんな「私」が通う高校に、小学生のときヴァイオリン教室で憧れていた年上の方が、
教師として赴任してきます。しかし再会した彼女の変わりようが、「私」には謎でした。

夏休み、「私」は小学三年生まで過ごした故郷を訪ねます。そして、当時通っていたヴァ
イオリン教室に向かうのでした。

主人公の行動描写と心情描写の配分がよく、舞台背景の設定や登場人物の配置にも工夫
が凝らされていることに感心しました。ラストの「私」の「決意」はいささか強引な気も
しますが、恩師と電車をストレートに生かしているところに、作者の潔さを感じました。

楽器を手にし、音楽と真摯に向き合う過程で、さまざまな葛藤を抱えたことがある人。
また音楽以外の習い事や勉学でも、自分が続けているのは親のためなのか、自分のためな
のか…そんな疑問を抱いたことがある人。そして、自分の存在意義について悩んだことが
ある人。そういった読者の共感を呼ぶ作品だと思いました。

佳作「青い国」は、読んでいてワクワクする物語。作者は脳内に浮かぶファンタジーワ
ールドを、楽しみながら文字に起こしているのではないのでしょうか。

設定が曖昧な部分や展開が無理やりと思える箇所など、気になるところも多いですが、
壮大なスケール感があり、創作する喜びがあふれ出ている勢いのある作品でした。どうか
これからものびのびと書いてください。

コロナ禍のなか、力強い作品が集まったことを、心より嬉しく思います。